

放射性廃棄物処分の社会的側面についての 国際サマースクール試行報告

The Report of a Trial Case of the International Summer School
on the Social Aspects of Radioactive Waste Disposal

東大院工 ○寿楽 浩太, 小田卓司, 勝木知里

クインテッサジャパン 川崎大介

米カリフォルニア大学バークレー校 Joonhong Ahn

Kohta Juraku, Daisuke Kawasaki, Joonhong Ahn, Takuji Oda & Chisato Katsuki

東京大学グローバル COE プログラム「世界を先導する原子力教育研究イニシアチブ」では、提携先のカリフォルニア大学バークレー校（UCB）と共同で、放射性廃棄物処分について、社会的側面を含む体系的・網羅的な学習の場を提供する国際サマースクールを去る 8 月に実施した。本報告では、本スクールのねらいやデザインを紹介するとともに、開催の実際を速報する。

キーワード：放射性廃棄物処分，社会的側面，国際サマースクール

1. 開催意図

放射性廃棄物処分は、実際の事業としての本格化がこれからという段階にあり、また、それ自体が直接に便益を生み出すわけではないというバックエンド特有の性質から、社会的側面にいっそう配慮した展開が求められることは論を俟たない。特に高レベル放射性廃棄物処分は、地層処分場立地が喫緊の課題とされながらも、現実には候補地となりうる調査地点を選定する段階にとどまっており、何らかの対処が求められる。そもそも、原子力分野全体にとって社会的側面が重要であることは今や自明と言っても良い。こうした認識に呼応して、社会科学的知見を生かした実践の重要性が叫ばれて久しいが、実際にそれを担う人材は誰かという問題が依然存在する。「専門家」とされる社会学者にいわば「外注する」モデルも考えられるが、技術者・工学者の側が社会的側面に関する素養を十分に備え、彼らとの実りある協働を行っていくという方向性を追求することとした。

2. 開催概要

そこで、提携先の UCB との共同作業により、主に工学を専攻する技術系学生を対象に、放射性廃棄物処分について、社会的側面を含む体系的・網羅的な学習の場を提供する国際サマースクールを計画した。科学技術と社会の関係についての研究や実践では、なおも欧米が先行していることや、国際経験の場を兼ねるメリットに鑑み、開催場所は同大、使用言語も英語とした。実質的な講義期間は 5 日間、21 コマの講義と 2 つのパネルディスカッションを設け、各日とも学生セッションの時間も設けて主体的な参加を促した。講義は科学技術の社会学、核不拡散の国際政治といった社会科学的テーマから地層処分の技術的解説まで幅広く設定し、放射性廃棄物処分についての複眼的・多面的かつ網羅的な理解を目指した。講師は日米を中心に国際的に活躍する顔ぶれを揃え、学生も日米を中心に各国から参加した。さらに、講義期間後に米ニューメキシコ州の WIPP（放射性廃棄物隔離試験施設）でのフィールド研修も行い、実際に即した理解の深まりをねらった。

3. 考察

本スクールは、あくまでも社会的側面を含めた「素養」の涵養をねらっており、直ちに問題解決を指向していくものではない。しかし、この「素養」は、参加学生が将来、専門家として活躍する際に、社会的側面に配慮し、時には社会科学の専門家や一般市民をも巻き込んだ実践に携わる上で大いに役立つと期待される。報告では開催の実際を速報した上で、こうした教育を大学・大学院教育のカリキュラムに組み込む可能性を見据えた考察を加えたい。